

## 「CSR報告書2015」を読んで



2015年8月1日  
神戸大学大学院  
経営学研究科教授  
國部 克彦

### 第2の創業とCSR

鉄道会社にとって、安全に安定して大量の人員を輸送することが社会的使命であった時代は既に過去のものとなり、現代の鉄道会社には、上記の使命を当然のものとして、利用者ひとりひとりに寄り添ったきめ細かなサービス、さらには沿線に住む人々の暮らしの向上や町そのもののグランドデザイン、沿線地域の発展や文化保護までが求められています。京阪グループにおいても、鉄道事業だけではなく、不動産や流通などの事業の多角化によって、これらの要求に対応されています。創業から100年余を経て「第2の創業ステージ」と称され、新たな社会的責任を果たされようとしていることは企業使命に関わることで、大変重要です。

本報告書においても、鉄道事業における環境保護はもちろん、バリアフリー化の状況や駅での外国人観光客への通訳サービスなど、きめ細かなサービスの事例が記載され、さらに、くずはモールに代表される沿線都市の価値向上のための活動、日本酒をキーワードとした文化保護活動まで、多方面にわたる取組を見ることが出来ます。

対応しなければならない領域は多岐にわたりますが、このような場合は、社会の声を反映したマテリアリティ(重要度)の分析を取り入れられてはどうか。第2の創業を目指すべき時期でもありますので、ステークホルダーの声にきめ細やかに対応して、社会的責任を示す姿勢を示されることで、事業価値のみならず社会的価値の創造に貢献できると思います。

### 京阪グループとしての情報開示のあり方

京阪グループでは2016年度を目処に、持株会社体制への移行を検討されています。鉄道・運輸、不動産、流通、レジャー・サービスの4事業を、大阪・京都・滋賀といった特徴の強い事業地域にあわせ、バランスよく発展させていくことが期待できます。また沿線外への取組の拡大も期待されます。これにより情報開示においても、安全、環境保全、社会貢献、そして価値創造といった必要な情報を、それぞれの事業分野、事業エリアで適切に開示していくことが求められると思われまます。本報告書では、グループ会社の状況が2ページにわたって取り上げられていますが、それぞれ京阪グループが社会に提案するビジネスモデルの下に活動されていることが読み取れます。将来は、これらの情報を、京阪グループが認識する社会課題を解決するために提供する、価値創造のビジネスモデルとして明瞭に提示されれば、統合報告が求める内容を十分満たすのではないかと考えられます。複雑に発展していく京阪グループの活動を、より多くのステークホルダーに理解していただき共感していただくために、統合報告を含めた、新たな情報開示の形式を検討する段階にさしかかっていると思われまます。

## 第三者意見を受けて

この度も貴重なご意見をいただきありがとうございます。  
前回の第三者意見において、グループ会社の活動についても積極的に開示するようご指摘をいただいたことを踏まえ、今回の報告書では当社単体から一歩踏み込み、「グループ会社における取り組み」として少し裾野を広げた内容といたしました。  
また、当社を中心とする京阪グループでは、平成27年度から3カ年の中期経営計画「創生果敢」において、「第2の創業ステージ」と位置付け、明治43年鉄道開業時の創業の精神に立ち返り、変化著しい時代の中でも社会の要請に応える商品・サービスを創造し、人々の暮らしの向上はもとより社会に貢献し続けること

の出来る企業グループを目標に掲げ、新たなチャレンジをスタートしております。

従いまして、来春予定しております新たな経営体制(持株会社体制)への移行を控え、CSR活動の充実はもとより、今後の京阪グループの各事業において目指す姿をステークホルダーの皆さまにご理解いただけるよう、頂戴したご意見を参考とさせていただきます、情報開示のあり方含め、引き続き努力してまいります。

平成27(2015)年8月

京阪電気鉄道株式会社  
経営統括室 経営戦略担当 部長 塩山 等